2023・6・8【角川俳句賞2023 プランB 初案】選50句

うすら氷も日暮の色となりにけり
残りたる雪よ氷よ日の暮よ
虚子の忌のけふ波音の由比ヶ浜
江ノ島に壺焼を食ふ雨の昼
若草や躑躅の花の日影にも
桜狩花見の巷下に見て
大いなる新芽春筍芽吹く
皮張りのドアの重たき春の闇
初夏や白き細身のカフェの椅子
神の手に包まれ甘し柏餅
長旅にあらねど江戸へ初鰹
鯖のこと何も知らざる柿若葉
チェリーより若返りたるさくらんぼ
青年も壮年も過ぎ夏衣
余生とは豆飯を愛しむに似て
江戸屋敷跡の看板花菖蒲
花菖蒲枯れて薄茶と茶色かな
咲きたるはウリ目ウリ科キュウリの花
十薬の白き香または緑の香
紫陽花に香の七変はなかりけり
年ごとの梅干す笊の赤き染み
白濁と言ふべし烏瓜の花
日本にラジオ体操夏休
夏休算数国語理科社会
濃き色を薄く伸ばして涼しさよ
紅薔薇棘あることも涼しけれ
長茄子の寝そべるやうな長さなり
自らの羽音に酔うて飛ぶ蚊かな
真上より見る水盤の金魚かな
申し訳ないと蟬の子埋め戻す
空蟬は枯草色にもう飛べぬ
ががんぼに為す術もなき部屋の壁
巣箱からちらと覗けり蛇の首
幾度も巴里の開放巴里祭
河童忌や目刺の腹の白き皺
ふれてみて片蔭の壁熱きかな
絵団扇の裏の酒屋の名前かな
家持の煙を今に鰻の日
天丼は箸水羊羹は匙
蜜豆の衣装豪華になるばかり
白玉を一汗かいて作りけり
灯を消して夜空を知らぬ金魚かな
蓋をして蒸らすが如き夜の暑さ
夏期講座終へ高原の駅を発つ
2ビル涼し食事の前のショッピング
デパートの一つ消えたる秋の町
紙よりも重たき鋏露けしや
夏休み図書館・本屋・古本屋
大樹より太き藁塚寄りかかる
寝返ればころりころりと去年今年

桐3段組14ポ BIZ UD明朝 Med 太 2023年6月8日 20:52 〈1〉 桐10